

立命館大学人文科学研究所重点プログラム  
「グローバル化とアジアの地域」

## グローバル化とアジアの観光研究

日時: 2016年10月29日(土) 13:00~17:00

場所: キャンパスプラザ京都・6階・第1講義室(立命館大学)

テーマ: 癒しの景観——高原避暑地軽井沢の形成と日本人への受容——

報告者: 前田一馬(立命館大学大学院 文学研究科 後期博士課程)

本研究は、欧米的な価値観によって近代日本に形成された高原避暑地に着目し、人間の健康につながる癒しや療養の場所感覚とその文脈性を問う、癒しの景観(Therapeutic Landscape)の視点を取り入れ、社会的につくられた環境観や健康観にもとづいて、特定の空間が新しい方法で使われるようになる過程を検討する試みである。具体的には、明治期に形成され高原避暑地のなかでも大規模に発展した軽井沢を事例とし、外国人にとって意味に満ちた癒しの景観としての高原避暑地の形成を明らかにし、次いで大正期以降、日本人による高原避暑の受容を検討する。1880年代半ば外国人(宣教師)たちは、荒原の広がる軽井沢に母国の風景を見て、避暑地として積極的に意味づけた。Geslerが提示した自然・建造・象徴・社会環境の4要素ごとに外国人による場所経験を整理した結果、軽井沢に意味が蓄積され、身体的・精神的な回復を可能とする癒しの景観としての高原避暑地が構築されていく様相が明らかになった。

日本人は外国人が軽井沢に付与した、癒しの場所感覚や高原避暑の実践を開発の想像力の基盤とし、自らの文化感覚に合う形で、癒しに資する豪華な別荘・ゴルフ場・温泉・競馬場など新しい価値を加えていった。一方、旅行と健康思想、紫外線と健康との関係性が盛んに語られるなかで、軽井沢のような高地が海と並んで健康に資する場所とする医学的見解が現れ、さらに多くの日本人避暑客を招くことになったと考えられる。さらに軽井沢と療養を結びつける要素として、軽井沢に滞在した作家の存在があった。このように高原避暑の受容はたんに西洋文化の模倣だけでなく、文化感覚、健康や癒しをめぐる価値づけといった複数の社会的文脈性の関係のなかにある。

テーマ: 戦跡に関する新たなダークツーリズムの展開——大刀洗飛行場跡地を事例として——

報告者: 麻生 将(立命館大学 文学部 地域研究学域 京都学専攻 特任助教)

近年、知覧特攻平和会館や呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)などのような、戦争遺跡をめぐる新たなダークツーリズムが展開されている。本発表で事例とする大刀洗飛行場跡地(以下、特に断りがなければ「跡地」とする)もそうした新たなダークツーリズムの一つとして位置付けられている。そこで本発表では、福岡県中西部の主に三自治体(朝倉市、筑前町、大刀洗町)に点在する跡地をめぐるダークツーリズムの展開について、各自治体の対応の比較を通して検討した。詳細は当日の発表の中で述べるが、上記三自治体の間で跡地とダークツーリズムに対する取り組みが大きく異なっていることが明らかになった。

筑前町は「食と平和」をコンセプトとし、農産物直売所、温泉と並んで大刀洗平和祈念館を町のツーリズムの主要な柱としている。また、大刀洗町では近年になって宅地開発などによる跡地の

消滅対策として、町が保存活動のための調査を開始したほか、飛行場が存在した当時を知る住民による跡地のフィールドワークを実施するなどの活動も展開されている。一方、朝倉市では行政として跡地の保存や平和教育、跡地のツーリズムへの活用などは特に行っていない。市側は跡地を観光資源とは捉えておらず、平和について発信することを主たる目的と考えているためである。

このように、同じ戦争遺跡をめぐる隣接する三自治体の間で対応が異なることが明らかとなった。このことは、跡地の今後のダークツーリズム的展開と何らかのかかわりを持つ可能性が考えられるとともに、跡地を知覧や呉のような戦争遺跡をめぐる新しいダークツーリズムの事例としてカテゴリー化することが困難であると指摘できよう。

テーマ: 知床羅臼から見たエコツーリズム

報告者: 古村 学(宇都宮大学 国際学部 准教授)

知床羅臼には、野生動物が豊富に生息している。この野生動物の豊富さゆえに、知床は世界自然遺産に登録された。また、これらの資源ゆえに、ホエール・ウォッチング、バード・ウォッチング、最近ではヒグマ・ツアーなど野生動物観察を目的とした観光は人々を惹きつけている。ツアー業者の数は少ないが、羅臼における観光アトラクションのもっとも重要なものとなっている。ただ、これらのツアーなどを行なっている業者は、エコツーリズムという言葉を利用することはない。

羅臼においてエコツーリズムといえば、漁業見学、体験型のものである。知床でエコツーリズムが本格的に導入されたのは、環境省による「エコツーリズム推進モデル事業」が発端であった。この事業に際して羅臼では、知床財団による「冬のスケソプログラム」や「春のウニ採りプログラム」といった漁業見学、体験型のモニター・ツアーが企画された。この方向性は、エコツーリズムが知床財団の手を離れ、知床羅臼観光協会に引き継がれた後も、「知床赤岩地区 羅臼コンブエコツアー」として引き継がれている。

これらのエコツアーは、野生動物を対象としたツアーの盛況ぶりにたいして、かならずしも集客力の高いものではなく、継続性も弱い。産業観光は地域生活に密着したものであるため、地域に根づいたものとなる可能性を持つ。しかし、観光客にとっての知床とは、野生動物であり、漁業体験ではないということが指摘できる。地域住民と観光客の間にある認識上の差異ということができよう。

本報告では、この現状を通して羅臼社会の特質を明らかにするとともに、羅臼社会にとってのエコツーリズムの意味を考えていきたい。そのうえで、環境省主導によるエコツーリズムが地域社会にたいして持つ意味を批判的に考察する。